

## 平成 21 年のアユ資源調査結果概要

酒井明久・太田豊三・西森克浩・井戸本純一・上野世司・金辻宏明・上垣雅史・  
遠藤 誠

### 1. 研究目的

アユの資源水準や成育状況を評価するため、魚群分布調査、産卵状況調査、ヒウオ生息状況調査および成育状況調査を実施した。

### 2. 研究方法

魚群分布調査は、1月から8月まで毎月1回、北湖の水深30m等深線に沿ったコース上に出現する魚群数を観測した。

産卵場状況調査は、8月から10月にかけて延べ5回、北湖に流入する11河川の産卵場においてアユの産卵数を調査した。

ヒウオ生息状況調査は、10月から12月まで毎月1回、北湖において網口1m×2mの角形幼生網による1,000mの水平曳きを18回行い、1曳網当たりのヒウオ採集尾数を求めた。

成育状況調査は、エリとヤナの操業期間中、

それぞれの漁獲標本を収集し、体長および体重を測定した。

### 3. 研究結果

魚群数は、6月まではほぼ平年並みで7月以降は平年を大きく上回った(図1)。

産卵数は、107.4億粒で平年値124.2億粒をやや下回った(図2)。

ヒウオ生息密度は、最も採集数の多かった11月の調査では平年を上回った(図3)。

平成21年2月以降の漁獲魚の平均体長は、エリは平年並み、ヤナは漁期を通じて平年を上回った(図4)。

### 4. 研究成果

これらの調査結果は水産試験場ホームページに掲載し、漁業関係者等へ情報提供した。

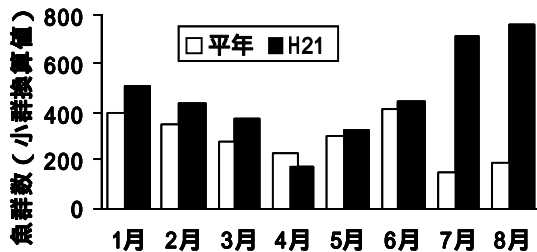


図1 魚群数の推移。  
平年値は過去10年間の最大・最小を除く8年間の平均値。

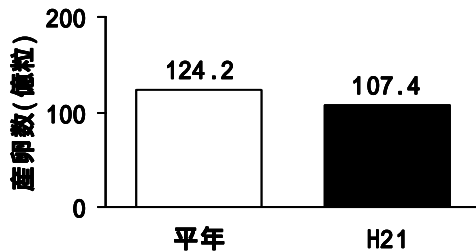


図2 天然河川における産卵数。  
平年値は過去10年間の最大・最小を除く8年間の平均値。

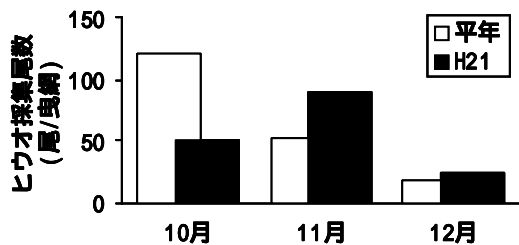


図3 ヒウオ生息密度。  
平年値は過去10年間の最大・最小を除く8年間の平均値。

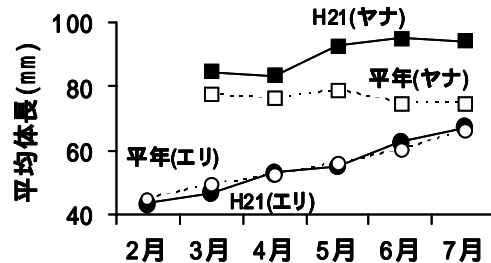


図4 エリ・ヤナ漁獲魚の平均体長。  
平年値は昭和50年から平成20年の平均値。